

神楽坂に似合う

神楽坂のその文字通り坂を上って行くと大久保通りと交わる。この交差点が「坂上」だから俗にいう神楽坂はここら辺までなのかもしれない。でも「坂上」の先も坂は上っていてその先に地下鉄東西線の神楽坂駅があるのだからまだ神楽坂は続いているらしい。その駅のちょうど真上にアユミギャラリーがある。戦後まもなく建てられた木造 2 階建ての小さな洋館である。その 1 階がギャラリーになっていて世の中の喧騒の隙間に一息つくのが似合っている。

「ひさしぶり！」「ここ分かった？」「うん！すぐ分かった！今どきこんな建物珍しいもの。」「でしょ！」個展を開いている作家さんの友達がやって来たようだ。「こんな建物まだ残ってるんだねえ。」そう言うと彼女は出窓に沿って造付けられたソファに座って、床から壁から天井まであたりを見回した。「なんだか落ち着くでしょ！」個展の主が隣に座って自慢気に言った。「いつまでも居付いちやいそう。」「でしょ！」と、気がつくといつの間にかやってきた男がお茶を差し出していた。「どうぞ」「ありがとうございます・・・あのどちら様で・・・」「名乗るほどのもんじゃあございやせんよ。ただの通りすがりの旅人ですよ。」「はあ・・・？お茶・・・一緒に・・・」「そいつはいけません」「どうして？」「切りがありませんから」「切りがない？」「ええ、お言葉に甘えてお茶を頂く、そうすると夕飯でもってことになって、そしてそのまま飲みに行くことになる。そうすれば今日の宿はって事になって、それでは泊まらせてもらうって事になります。そして朝になってしまうのですよ。」「そんなぁ考えすぎですよ。第一これはあなたに頂いたお茶ですし・・・」「いえ、旅の続きがありますんで。」そういうと男はギャラリーを出て行った。

アユミギャラリーはギャラリーの他に神楽坂建築塾なるものも主催している。他に美術塾や写真塾もある。第 2 土曜の夜は建築塾の日だ。講義が終わってそのまま懇親会になって 10 時過ぎにお開きになると「玉の湯・伊太八コースね」が合言葉だ。坂上交差点傍にある銭湯に行って、その後にその隣の隣のラーメン屋に寄るのである。銭湯は「第三玉の湯」というが第一と第二にはお目に掛かったことがない。それはそうと最近また値上げしたのが珠に瑕だ。でも、今どきめずらしい銭湯にいつまでもここに残ってもらう為には致し方ない。ラーメン屋はというとカウンターだけの小さな店だが、深夜にも拘らず行列ができるほどの繁盛ぶりだ。やはり店名を冠した伊太八ラーメンが基本だ。コクがあるのにサッパリしていて麺もコシがある。豚骨ベースで豆板醤の辛みが効いたスープが人気だ。

「ココ！ココ！前から来たかったんだよね。」「なかなかウマイなあ！」「ふーん。今どきこんなラーメン屋あるんだなあ。」連れの建築塾生が床から壁から天井まであたりを見回したながら言った。「近頃、なんか見た目だけ小奇麗なのばっかで、こう・・・なんていうか深みがある店って少ないじゃん！」「マスター！こちらの青年達にギョーザをやってくれ！」と、気がつくといつの間にかやってきた男がそう言った。「えッ！そりゃあ悪いッスよ。」「いいから。いいから」「じゃあ・・・旦那も一緒にやってくださいよ。」「そいつはいけません。」「えッ！なんで？」「切りがありませんから。」

そういう寅さんみたいな人が似合うまちは柴又だけではないのです。